

ベルギーの複数言語社会と教育実情

辻 井 輝 行

1. はじめに

以前、ひとつの国の中で単一の言語が話されているのは、日本と韓国（朝鮮）^{#1}だけである、ということを聞いたことがある。日本に住む我々の生活の中で、特殊な場合を除いて、^{#2}日本語以外は全く必要のないのが、現実である。一方、世界の多くの国々において、地理的、歴史的、政治的、あるいは経済的な理由などによって、複数の言語が使用されている。

単一言語社会に育った我々にとって、複数言語社会は不思議な珍しい社会としてしか映らないが、言語が生活に密着した存在であることを考えても、複数言語社会では多くの苦悩があり、またそれに則した工夫もなされてきたことも予測できる。ある意味では、典型的な2言語国家と言われるベルギーについて、以下紹介していく。

2. ベルギーの言語事実

a. FlemishとDutch, WalloonとFrench

ベルギーに入るといたる所で、2種類の言語表記が目につく。国名が“BELGIE”あるいは“BELGIQUE”、国王名が“BOUDEWIJN”あるいは、“BAUDOUIN”、首都が“BRUSSEL”あるいは“BRUXELLES”、などのいずれかもしくは両方で表記されている。

ところで、この2種類の言語は何であるかという点であるが、日本で出版されている書籍の説明では、フラマン語とオランダ語、ワロン語とフランス語とが、入り乱れて使用されている。『日本百科大事典』では「フラマン語とワロン語」、^{#3}『原色現代新百科事典』では「フラマン語とフランス語」が、^{#4}そして『世界大百科事典』では「オランダ語とフランス語、及びフラマン語とフランス語（ワロン方言）が公用語」として説明されている。^{#5}そこで、実際にベルギーの人々はどのように認識しているのかを紹介したい。PAN AM Director Belgium & LuxemburgのEugene J. VANDERSTRAETEN氏によると、北部ではFlemish^{#6}（フラマン語＝以下同じ）が、南部ではWalloon（ワロン語＝以下同じ）が話されている、との説明である。また、Flemish is a language, Walloon is not a language but a dialect であると付け加えてくれた。さらに加えて、Flemish is similar to Dutch, and Walloon is the same as French. と説明があった。ちなみに同氏は北部の人である。また、HOPITALCIVIL DE CHARLEROI、Directeur AdministratifのAVAUX Jean-Pol氏によると、南部ではFrenchが、北部ではDutchが話されているという。同氏は南部の人である。次に南

部出身で北部に住んでいるSABENA Belgian world airlines, cabin chiefの^{§9}RENARD Chantel氏によると、Flemish and Dutch are similar. The word “Dutch” is used for the people of Holland. We can recognize a Dutch man from a Flemish Belgian man by the way he pronounces the “g” letter, but both languages are the same. つまりオランダ語 (Dutch) とフラマン語 (Flemish) の違いは、“g”の発音のみであるということである。また、オランダ出身のUniversity of South Africa の Law Faculty, Professor ^{§10}Antony Sanders氏によると、Dutch and Flemish are same. であり、強いて言うなれば、Flemish is a dialect of Dutch, and Walloon and French are equal. である、とのことである。ヨーロッパ語が互いに近い関係にあることは周知の事実であるが、language であるか、dialectであるかについては、ひとつの認定の基準として、そこに国家が存在するか否か、という点があげられる。一例として、琉球方言は、ヨーロッパにおける一方言ほどの差異を有しているものの、日本語の位置づけというものになる。結局のところFlemishであるかDutchであるのか、またWalloonであるかFrenchであるのかは、言語の形態上の差というより、民族意識に根ざすところが大のようである。

b. 複数言語国家成立の経緯

「ベルギー (BELGIE・BELGIQUE)」の国名は青銅器時代に、ケルト系の勇敢な部族ベルガエ (Belgae=戦士の意味) が居住していたことに由来する。^{§11}ベルギーは、古くは^{§12}オランダとともに、^{§13}ネーデルランドと呼ばれていた。地理的にみると、ヨーロッパの中央部を占め、要衝の地であったために、スペイン、オーストリア、フランスなどの大国に相次いで支配され、その帰属が転々と変わっていった。ネーデルランド北部 (オランダ) は、17世紀になって独立を果たしたけれど、カトリックの色あいの強いネーデルランド南部 (ベルギー) だけは、別の歴史の道を選ぶことになる。

① 南北両文化圏

古代、^{§14}カエサル遠征の後、ローマ帝国に併合され、ベルギー南部地方はローマ化していく。そしてローマ帝国の文化が流入し、ラテン語の使用、帝政末期にはキリスト教の普及となる。他方、^{§15}3～4世紀にかけてのゲルマン民族大移動により、ベルギー北部地方にゲルマン民族の侵入が始まる。その結果、5世紀には、北部のゲルマン文化圏、南部のラテン文化圏という地域差が生まれることになった。

② スペイン、オーストリアの支配

中世 (9～14世紀) のネーデルランドは、多くの小封建的諸侯の所領に分かれ、14世紀末にはブルグンド王国の、次いでスペイン王国の支配を受けた。この頃、ベルギー北部の^{§16}フランドル地方では商工業が発展した。さらに下って、16～17世紀の^{§17}80年戦争で、ネーデルランド北部がオランダとして、スペインから独立した後も、ネーデルランド南部は依然として^{§18}スペイン領のまま取り残された。そして、スペイン王位継承戦争の後、ユトレヒト条約 (1713) によりオーストリアの、続くフランス大革命によって、ネーデルランド全体

がフランスの支配となった。しかし、ナポレオンの失脚の後、ウィーン会議によりオランダに併合された。もとより、この併合はフランス封じ込めのための列強による国際戦略によるもので、本来不自然なものであった。当時ネーデルランド北部（オランダ）はプロテスタントが多く、ドイツ的な風俗習慣であり、商業を主産業とし、自由貿易主義を利益とするのに対し、ネーデルランド南部（ベルギー）は¹⁹ゲルマン系のフラマン人とラテン系のワロン人とに分かれているが、宗教は共にカトリックで、文化的にはフランス圏に属し、農業と工業を主産業とし、保護関税政策を望んでいた。

③ ベルギー王国の誕生

合併下の統一オランダの国王ウィレム一世の統治は、ネーデルランド北部（オランダ）位なものであった。公用語はオランダ語とし、議員数、官僚数、また税制など、あらゆる面でネーデルランド北部のオランダ人優遇制度を取り、宗教の自由も圧迫したため、ネーデルランド南部では反抗同盟ができ、抵抗運動が起こるようになる。また1830年7月のフランスでの革命が直接の刺激となり、ブリュッセルの下層階級の人々を中心に独立運動が起こり、10月18日に独立宣言をした。新国王に、ドイツ系のザクセン・コーブルク・ゴータ公²⁰レオポルドを迎えた。レオポルド一世はフランス、オランダ両国との関係に力を入れた。

④ 第一次世界大戦

新しく生まれたばかりのベルギー王国が、他国の手中に陥るのを懸念したイギリスの提唱により、ロンドン会議で永世中立国として承認された。ところが第一次世界大戦において、ドイツの侵入から国土を守るため、「フランドルの戦い」で連合軍の勝利に多大の貢献を果たした。その結果、ベルサイユ条約によりベルギーは²¹ドイツの領土の一部の割譲を受けた。

⑤ 異民族の連帯 — 略史のまとめ

ベルギーという国はあってもベルギー民族もベルギー語も存在しない。北部（フレミッシュ地域）はオランダの南部の延長であり、オランダ系住民が住んでいる。南部（ワロン地域）はフランスの北部の延長であり、フランス系住民が住んでいる。つまり、ベルギーは、オランダから見てもフランスから見ても外れの地方だった。そのためオランダ、フランスいずれの国に支配されても、本国と対等の扱いはされなかった。オランダの支配下ではワロン人（フランス系）のみならずフラマン人（オランダ系）も、またフランスの支配



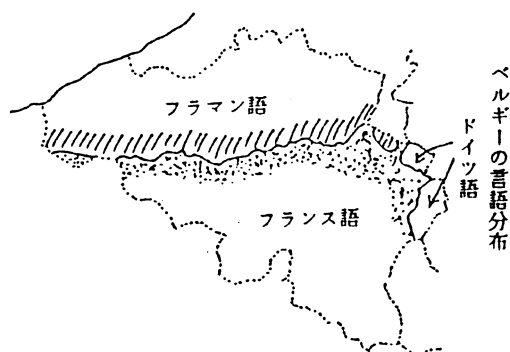
下ではやはり、フラマン人（オランダ系）のみならずワロン人（フランス系）も抵抗した。一般的には同一民族の結合が最も強いものであるが、この地方では外れの地方に住む者同士結びつきの方が強かった。その点を次にまとめる。

- 両民族が共に、熱心なカトリック教徒である。
- アントワープ（北部）を中心とする商業都市と、リエージュやシャルルロワ（南部）などの後背工業地との結合からくる経済効率。
- 両民族が居住してきたネーデルランド南部（ベルギー）のたどった歴史を共有しているという連帯感（両民族社会の共同連帯意識）が根強く存在する。

3. ベルギーの地域構成

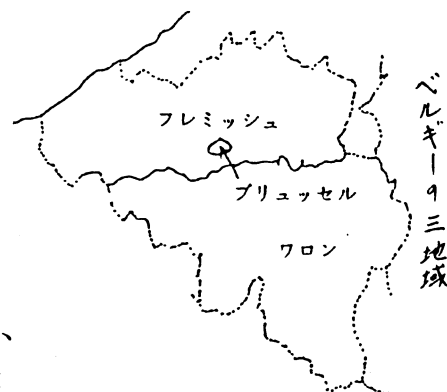
a. 3つの共同体（Communities）

同国は、^{註22}フラマン語、フランス語、及びドイツ語の共同体である。なお共同体（Community）を決定する要素は、それぞれの文化と言語である。



b. 3つの地域（Regions）

同国は、フレミッシュ、ワロン、及びブリュッセルの地域（Regions）より成っている。なお地域（Region）区分を決定する構成要素は、その領域（Territory）である。憲法の中にも4つの言語地域（Linguistic regions）が設定されている。つまり、^{註22}フラマン語地域、フランス語地域、ドイツ語地域、及び首都ブリュッセルを中心とする言語多重地域である。ブリュッセルの言語多重地域は、19の行政区より成るが、その圏内では、フラマン語のみ有効である施設はフラマン語共同体の政府の管轄であり、フランス語のみ有効である施設はフランス語共同体の政府の管轄である。



c. 共同体（Community）と地域（Region）

フレミッシュ地域（the Flemish Region）はフラマン語共同体（the Flemish Community）とは分離して組織されていないが、他方ワロン地域（the Walloon Region）はフランス語共同体（the French Community）とは分離して組織されている。またドイツ語共同体（the German language Community）は言語使用の面を除いては、他の2つの共同体と同じ権利を有している。

d. ベルギーの連邦制

同国の連邦政府の特質は、3つの地域と3つの共同体（ただし境界線は、地域と共同体

とで異なる)との組合せにある。3つの地域とは、フレミッシュ、ワロン、ブリュッセルであり、3つの共同体とは、フラマン語共同体、フランス語共同体、ドイツ語共同体である。フラマン語共同体とは、ブリュッセルとフレミッシュに住むフラマン語系の人々を、フランス語共同体とは、ブリュッセルとワロンに住むフランス語系の人々を、ドイツ語共同体とは、ワロンに住むドイツ語系の人々を指す。以上のことから、地域 (Region) とは領域 (Territory) を指し、共同体 (Community) とは人々の集合を意味することがわかる。

共同体と地域は、それぞれ独立した自治体としての法人格を与えられ、固有の議会と行政機関、及び事務機関を有する。中央政府は他のレベルには移行しにくい外交などの分野のみを管轄している。

4. 教育制度

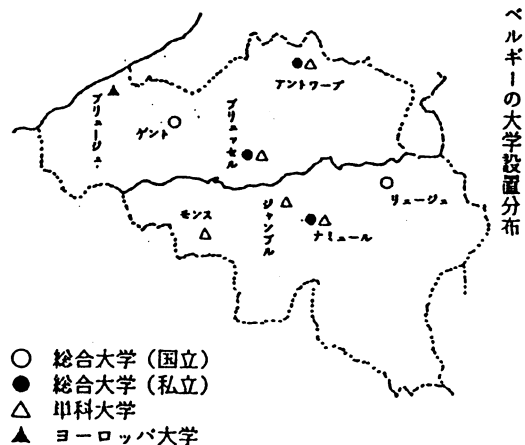
同国における教育は、他の西欧諸国と同様に、よく普及しているが、保守的なカトリックと学問の自由を主張する自由主義者との間の対立があり、折にふれて表面化している。

GNPに占める教育費支出の比率は1970年では5.57%で、フランスや当時の西ドイツよりも高い。しかし、大学進学率は必ずしも高いとは言えず、小学校入学児童数の5~6%にすぎない。他方、職業教育はよく発達しており、職業学校への進学率が高い。

教育制度は公立と私立の2つから成り立っており、公共機関によって組織された教育施設は“Official schools” (公立学校)として知られており、個人あるいは私的団体によっているものは“Free schools” (自由学校あるいは私立学校)として知られている。前者は中央政府や地方政府によって運営され、後者は主にカトリック系である。現在、教育人口の約4割が“Official schools”に、約6割が“Free schools”に通っている。

幼稚園は3歳から5歳、義務教育は6歳から17歳までの12年間である。それは、日本の小学校に相当する“Primary”6年間と、中学校と高等学校に相当する“Secondary”6年間である。なお履修科目等の内容についてはフレミッシュ地域とワロン地域とで異なる。

総合大学としては、ゲントとリエージュに国立大学があり、また私立(自由)大学として、アントワープ、ブリュッセル、ナミュール、それぞれ一箇所宛ある。また単科大学では、アントワープ、ブリュッセル、モンス、ジャンブル、ナミュールに、そしてブリュージュには国際色の強いヨーロッパ大学がある。しかし、大学における使用言語は、所在地のそれに一致する。



5. 中央政府と言語政策

作用があれば反作用があるようにベルギーにおいても、時代の流れ、社会の変化によっ

て微妙な作用を受けつつ、フラマン語、フランス語、そして1919年以降のドイツ語が共存してきた。既述の如く、同国の人々は、ベルギー人であることを認めながらも、同時に民族意識としてはフラマン人、ワロン人という意識が強い。使用言語についても、フラマン人から見ると自分たちはフラマン語を、ワロン人はワロン語を用いていると、またワロン人から見ると自分たちはフランス語を、フラマン人はオランダ語を用いているという認識が強い。特に公共施設内においては、来訪者が対峙する言語を使用すれば全くとり合わないのである。このような状況のもと、中央政府は、1980年代に入ってから連邦制を取り入れ、フラマン人とワロン人との自主自立化を進めてきた。そして、連邦化の第二段階案が1989年1月16日、上院を通過。この結果、教育と公共事業の二省と、一連の特殊な権限が、フレミッシュ、ワロン、ブリュッセルの3地域及び自治体に委譲されることになった。これは全てベルギーの言語事情によるものであり、ベルギー最大の問題は言語問題であるといわれるゆえんである。フレミッシュ地域の中に首都ブリュッセルがあり、この地域だけが言語多重地域とされている。ところが実際にはフランス語が圧倒的に優勢で、フランス文化圏そのもののようには感じられる。事実連邦化第二段階の規定に基づくブリュッセル地域議会の第一回選挙の結果、フラマン語系が11議席、フランス語系が64議席を獲得した。

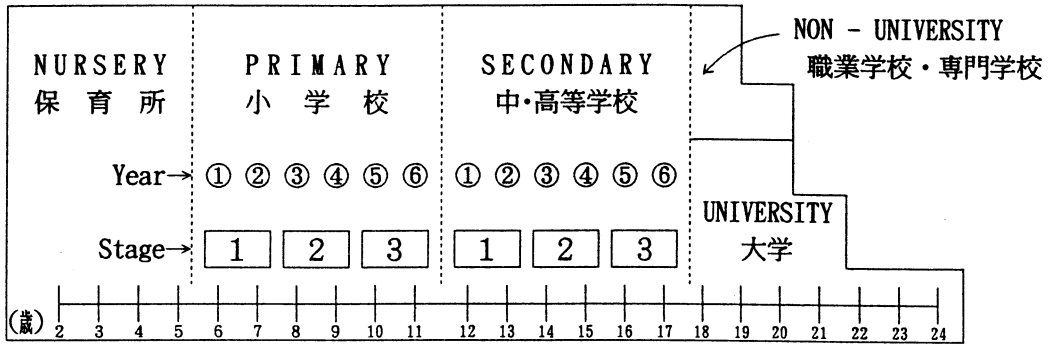
このような中央政府による連邦化政策にもかかわらず、言語地域間の対立は収まろうとはしない。しかし、中央政府は最終段階の連邦化案を現在検討中である。このような政府の苦悩の一端は、ひとつの年鑑^{註23}の表記にも如実に現れている。1975年度版では「ベルギーの公用語としてフラマン語（ゲルマン語派の一方言で、オランダ語に近い）とワロニー語（フランス語に近い）」^{註24}となっているが、1978年度版以降は「オランダ語（およびこれとほぼ同じのフラマン語）とドイツ語とフランス語（およびこれとほぼ同じのワロン語）」となり、公用語という語句は消えている。公用語及び両言語の呼称は、非常に微妙な部分であり、ベルギーの公的機関からの回答も両極端なものであったり、歯切れの悪い曖昧なものであったりする。事実として言えることは、フレミッシュ地域においてはフラマン語とワロン語という呼称を、ワロン地域においてはオランダ語とフランス語という呼称を用いており、対外的にはより知名度が高いという意味でオランダ語とフランス語という呼称を用いている。また国内的にはフラマン語を用いる人の方が多いにもかかわらず、対外的にはフランス語による表示、表現が多い。

現在約900万の人口で、約52%がフラマン語を、約42%がフランス語を使用している。そこには単に民族間の対立だけでなく、経済的発展の差や、人口増加率の差などがあり、双方にさらに複雑な意識が生じてきている。このような結果、教育においても大枠は中央政府で決められるが、実質的内容面は全て各共同体、地域に委譲されている。大学における教育科目も、唯一、水産関係のみが中央政府の管轄である。大学の設置にしても、双方の感情を配慮してであろうか、フレミッシュとワロンの両地域に、ほぼ均衡するように設置されている。

6. 教育概観

以下、統計資料によって、ベルギーの教育について眺めてみる。

教育年限一覧



義務教育である“PRIMARY”と“SECONDARY”の12年間は、各2年間を“1 STAGE”あるいは“1 CYCLE”とし、つまり2年で1段階として扱っている。

時間割の一例

フレミッシュ地域	Stage 1	Stage 2	Stage 3
宗教・道徳	2	2	2
環境観測	6	6	5
フラマン語（国語）	7	7	7
数学	6	6	6
第2言語（フランス語）	—	—	3
図画	1	1	1
工作	2	2	2
音楽	1	2	2
習字	1	1	—
計（小学校）	28	28	28

ワロン地域	Stage 1	Stage 2	Stage 3
フランス語（国語）	9	9 7	7
数学	5	5	5
交通安全	1/2	1/2	1/2
宗教・道徳	2	2	2
歴史		1 1/2	1 1/2
地理	3	3 1 1/2	1 1/2
自然科学		2	2
体育	2	2	2
図画工作	2 1/2	2 1/2 2	2
音楽	1	1	1
習字	1	—	—
市民教育	—	1	1
補習・助成訓練	2	2 2 1/2	2 1/2
第2言語（フラマン語）	—	—	2
計（小学校）	28	28	30

これは、あくまで両地域の代表例にすぎず、また近年とみに増してきている移住民児童生徒のために、異なった時間割を組むところもある。次に示すのは、フレミッシュ地域の移住民生徒の時間割である。

出生地の文化と宗教	2
フ ラ マ ン 語	8
フ ラ ン ス 語	2
移 住 民 の 言 語	2
数 学	5
環境（環境変化の要素）	4
造 形 美 術	2
体 育	2
技 術	4
計（中・高等学校）	31

次に、各地域に設置されている義務教育学校の割合である。

	フ ラ マ ン 語	フランス語 ドイツ語
国・共同体	17.95	13.96
州・地方公共団体	18.99	46.61
個人	63.06	39.43
計	100.00	100.00

この表より、フラマン語系は個人、つまり私立あるいは宗教団体による設置が多いのに対し、フランス語、ドイツ語系は公立学校の割合が高いことがうかがえる。

次に予算であるが、やはり人口に比して、フラマン語系の方が、フランス語系を上回っている。

予算 100万フランド	1985	1986	1987
フラマン語	153.458	157.487	154.623
フランス語	121.947	123.252	119.813
共通	17.718	9.409	9.699

次に、両地方の学校数の分布である。

		フ ラ マ ン 語	フランス語 ドイツ語
普 通 保 育 所		2 0 7 6	1 9 9 5
特 別 保 育 所		8 6	7 2
普 通 小 学 校		2 2 5 9	2 0 3 5
特 別 小 学 校		2 1 1	1 7 6
中 学 教 育	改 革 教 育 学 校	6 2 0	7 3 0
	伝 統 中 学	2 8 6	2 3
	伝 統 技 術 職 業 学 校	2 3 3	3 6
	特 別 技 術 職 業 学 校	1 2 2	9 3
	芸 術 教 育 学 校	1 2	4
高 等 教 育	保 育 所 教 師 専 門 学 校	2 5	1 7
	小 学 校 教 師 専 門 学 校	4 4	3 3
	中 ・ 高 校 教 師 専 門 学 校	3 5	2 7
	訓 練 助 手 教 員 職 員 専 門 学 校	—	6
	教 育 技 術 専 門 学 校	2 7	2 4
	高 等 技 術 学 校（短 期）	1 0 7	1 1 6
	高 等 技 術 学 校（長 期）	3 1	3 0
	芸 術 教 育 学 校	9	6
計		6 1 8 3	5 4 2 3

7. おわりに

我々は、明治以降の同化政策、教育政策にも助けられ、単一民族、単一言語国家という意識の中で育ってきた。日本の社会においては日本語だけを知っていれば、特例を除いて日常生活を送るのに支障はない。ところがひとたび目を外に向けると、言語問題で苦しむ国、多くの労を費している国の多いことに気づく。国際化の進む現代、複数の言語を操ることにおいて、日本人は大きく立ち遅れている。我々が外国へ行った時言語における不自由さを感じる程度と、外国人が日本へ来て感じる程度はいかがであろうか。日本の社会はそれほど国際的な社会にはなっていないのである。

筆者はベルギーを訪れ、当初、「国語と外国語」という意識で研究を始めたが、たちまちのうちにその方針を改めざるを得なくなった。ベルギー人にとって外国語（foreign language）という意識は、我々のそれとは相当の隔たりがあり、第1言語（the first language）、第2言語（the second language）などと呼ぶ。フレミッシュの人々にとっ

てはフラマン語、フランス語、英語、ドイツ語の順に、ワロンの人々にとってはフランス語、フラマン語、ドイツ語、スペイン語の順に並び、これに従って学んでいくという。そのため、我々日本人の国語 (mother language) と外国語 (foreign language) の意識とは相当の隔りがある。

最後に、この稿をまとめるにあたり、フラマン語から英語への翻訳には南アフリカ大学 (UNISA) 教授、Antony Sanders 氏の、英語の微妙な意味の解釈には大西真奈美姉、ベルギーの歴史に関しては野田泰宏兄の協力によった。さらに細部に渡り、特に “Flemish” と “Walloon” という語の解釈上の微妙な点については、在日ベルギー国大使館文化部の教示を得、ベルギー滞在中は、PAN AM director の Eugene VANDERSTRAETEN 氏に、生活及び研究の全ての面において援助いただいたことを記し、感謝する次第である。

注1 日本には、アイヌ語が存在する。

注2 外国製品の原語による説明書。外国人との会話。地名、公共建築物の案内表示など。

注3 『日本百科大事典』第12巻 (昭和39年 小学館刊)

注4 『原色現代新百科事典』第7巻 (昭和43年 学習研究社刊)

注5 『世界大百科事典』第20巻 (昭和42年 平凡社刊)

注6 同氏は、フレミッシュ地域に住むフラマン人 (オランダ系)。

注7 Flemish は、地域、人、語のそれぞれに対する語である。日本では「フラマン人」「フラマン語」が一般的であり、意味の区別を明確にするため、本稿では、「フレミッシュ地域」「フラマン人」「フラマン語」と使い分ける。

注8 同氏は、ワロン地域に住むワロン人 (フランス系)。

注9 同氏は、フレミッシュ地域に住むワロン人 (フランス系)。

注10 同氏は、南アフリカ共和国、プレトリアに住むオランダ人。

注11 本稿では、「ベルギー王国」のことを「ベルギー」で表す。

注12 本稿では、「オランダ王国」のことを「オランダ」で表す。

注13 本稿では「水面より低い土地=Nederland」に由来する地域名を「ネーデルランド」で表す。

注14 ガリア征服 B. C. 58~51年

注15 一般的に日本では4世紀末から6世紀中頃として知られている。

注16 フレミッシュ地域の一部、フランドル州にはほぼ一致する。

注17 1568年オランダ独立戦争、1609年休戦条約、1648年ウェストファリア条約、までを指す。

注18 ネーデルランド南部 (ベルギー) は、スペイン領ネーデルランドと呼ばれた。

注19 オランダ系のフラマン人、フランス系のワロン人と呼ぶのが適当であろう。またフラマン人、ワロン人と言うのは、日本では例えば“播州人”と言う程度の意味合いの

ことである。(駐日ベルギー国大使館、文化部による。)

注20 1831年の憲法は、フラマン語とフランス語両方の使用の自由を認めたが、政府は議会、学校、法廷でフランス語のみを公用語として用いさせた。これに対しフラマン人の不平が高まり、1898年にふたつの言語の平等を確立する法律が制定された。

注21 現在も、リエージュ州の東端部はドイツ語圏である。

注22 「EDUCATIONAL DEVELOPMENTS IN BELGIUM」では、オランダ語 (Dutch) と表記されている。

注23 『ブリタニカ国際年鑑』

注24 1976、1977年度版には、言語に関する説明はない。

注25 「EDUCATIONAL DEVELOPMENTS IN BELGIUM」より

参考資料

- 「EDUCATIONAL DEVELOPMENTS IN BELGIUM」 (International conference on education 1988)
- 『ESPACE ET SOCIETE-ATLAS ERASME』 (EDITIONS ERASME p. 42)
- 『経済調査資料』第33号「ベルギー事情」(社団法人 日本工業倶楽部)
- 『ブリタニカ国際年鑑』 (T B S ブリタニカ)

協力者

- Eugene J. VANDERSTRAETEN
PAN AM Director Belgium & Luxemburg
- L. MARLIER
GOUT OFFICIAL of BELGIUM MINISTRY of EDUCATION
- RENARD Chantel
SABENA Belgian world airlines, cabin chief
- AVAUX Jean-Pol
HOPITAL CIVIL DE CHARLEROI
- Igor BALLEZ
Universite Catholiqure de Louvail
- Antony Sanders
University of South Africa, Law Faculty professor
- 大西真奈美
兵庫県立高砂高等学校 教諭
- 野田泰宏
兵庫県立津名高等学校 教諭
- 駐日ベルギー国大使館文化部